

#### 上演④ 松蔭高校「ゴリラゴリラゴリラ」

幕が開くと、この物語の狂言回し役である美琴が、主人公である奥山千夏の紹介を始める。この美琴の登場から観客は始終この物語に魅入られることになる。美琴がテンポよく軽快に語るのに合わせて、俳優もテンポよく動き回る。大道具も動き、音響も響き渡り、照明も切り替わる。全てがテンポよく進んでいく。間口の広い舞台だったため、俳優、スタッフともにおそらく県大会よりも慌ただしく動き回ったことだろう。しかし、むしろそのバタバタとした慌ただしさがこの物語のコミカルさを際立たせた。そしてそのようにパワフルに場面が転換し、俳優たちは動きも台詞も激しく演じているにも関わらず、俳優たちの動きは乱れず、素晴らしい演技を披露してくれた。狂言回し役の美琴、素晴らしいゴリラの動きの演技をしてくれた千夏とジュリアン、そしてこの物語のコミカル性を引き立てたチンパンジーのような大学教員、山田先生。他の登場人物も含め、動きも台詞も乱れることなく演じ続けた。そのおかげで我々観客は彼らの作り出す素晴らしいテンポに乗りながら夢中になって観劇をできた。

この楽しいお芝居は美琴が生まれたシーンから雰囲気が変わっていく。私たち観客は千夏という現代女性の葛藤に共感しながらこの物語世界に没入していく。ところが、成長した美琴が千夏を訪ね、親子が語らう場面で私たちは気づく。幼い頃、母のために、母からの愛を我慢し、自分の思いに嘘をついてきた美琴が、「ママ、大好き！」と本当の気持ちを告白して抱き着く。この時に私たちは気づいた。この物語は娘が母に愛されるための物語だったのだ、と。私たちは美琴という語り手のガイドのもと、千夏の物語を観ているつもりだったが、それと同時に美琴の母への愛の物語も同時に観ていたのだ。この愛の物語に気づいた時、私たちは深く感動した。

観終わった後、上質なコメディを観た後の楽しい感情と、親子の愛への物語への感動の2つの感情がしばらく私を支配していた。演劇部員のチームワークが抜群で、自分たちのやりたい演劇世界に観客を引き込む素晴らしい上演だった。